

残したい信州の自然 (その2)

—水田雑草の事例—

中山 冽 (佐久市鍛冶屋 194)

Kiyoshi Nakayama: Valuable landscape in Nagano (1): a case study of a various plants in rice field

はじめに

昨年 (2002 年)、臼田町誌の調査の折、水田内に多量のオオアカウキクサのあるのを見て大変驚いた。少なくとも筆者の知る範囲、特に佐久地方には絶滅してしまったのではないかと考えていたものであり、水田の雑草となっているのを見たことはなかった。目の色を変えて観察している中で、ふとこの種の将来に想いをはせた。この水田は、これからも水田であり得るのだろうか、除草剤を使用されたらどうなるのだろう。絶滅危惧種にも指定されながら、この生育環境は非常に危ないものと思われた。

では、どうすればよいのかと考えているうちに、水田雑草には他にも対象となる種が、いくつかあることに気づいた。サンショウモ、ミズオオバコ、ヤナギスズタ、スズタ、ウリカワ等々である。これら、水田内の植物についてはあまりにも人々の生活と密着していたためか、植物学的な関心も薄く、生活史や生態についても、あまり調べられていないように思うし、稀少種と言われながらも、その保護・保全についても、話題にのぼることが、少なかったのではないか。そこで、これらの2、3の種について、筆者の知り得ることを話題とし、水田雑草への関心を高めてほしいものとねがい本稿を記した。

水田内の雑草3種の話

(1) オオアカウキクサ *Azolla japonica* Franch. et Sav. (アカウキクサ科 アカウキクサ属)

県 R.D.B. (2002) の絶滅危惧 IB 類、出現するメッシュ数 2、軽井沢町、佐久市となっている。また、県植物誌 (1997) では、飯山市 (1968 採集) と飯田市 (1932 採集)、佐久市の標本を記し、全県分布となっている。このうち、飯山市と飯田市の情報はその後全く聞かないので、現在、最も可能性の高いのは軽井沢町と佐久市である。この2ヶ所もついては筆者の知り得るところであるが、この数年来、生育が確認されていない。

そんな状況の中での今回の発見であった。2002年10月 臼田町ナニ新田にて小さな休耕田の水の上に赤い藻のようなものが一面に浮いていた。近づいてよく見るとオオアカウキクサと見られた。コウキクサと見られる緑色とのコントラストは見事であった。近年は外来種が日本に入っているという情報もあったので、早速、自然保護研の大塚氏に送り、同定を願った。結果、日本産のオオアカウキクサと確認された。

その後、道路に沿った両側の水田を見に行くと、連続して7~8枚の水田において水の残っている場所には必ずと言ってよいほど浮かんでいた。水のなくなった場所では大きな集団となって盛り上がり、葉を立て

て、別の植物と思われるような姿をしている。道路に沿った一本の用水路から流れ込んだものであろうことが容易に考えられたのでこの用水路に沿って上流へ追ってみた。すると、最初に見た休耕田のすぐ上の池から流れ出していることがわかった。この池“地藏池”と呼び、完全な湧水池である。8 X 5 m ほどの長方形、水深 1 m 余りで、水底から盛んに水が湧き上がっている。一見すると透明な水中にコカナダモの繁茂しているのが見えるのみだが、よく見ると石垣となった池の周辺部に幅 10 cm ほどのオオアカウキクサの赤い帯が見えた。湧きあがる水のため端へ寄せられているようである。近くの住民に聞くと、この草は昔からあつ

たという。だが、大切な用水池のため、毎年ポンプで泥や水草を吸い上げて、きれいにしているの、このごろは大部少なくなったとのことであった。

唯一、南佐久植物目録(1995)には記録がある。図鑑類によると、根毛はなく、冬は先端部を残して枯れる……とされているが、観察する限りでは、根には短い針状の刺のようなものが、多く着いているし、2002年2月6日での観察でも、秋の状態と全く変わらない状態で生きていた。水田内のものは、積雪のため、観察できなかったが。種の保存を考えていく上でも、野生状態で生きのびている本種の実態を早急に究明しておくことの必要性を痛感した。

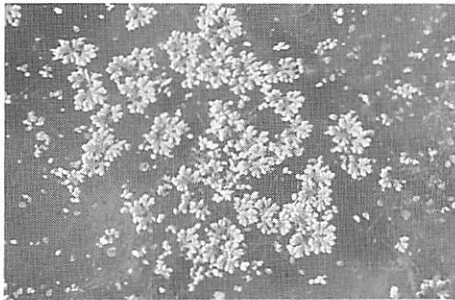


写真 1. 水に浮くオオアカウキクサ
(臼田町十二新田：202. 10. 11)



写真 2. 水がなくなると立ちあがる
オオアカウキクサ(同左：2002. 11. 02)

(2) サンショウモ *Salvinia natans*

(L.) A11. (サンショウモ科 サンショウモ属)

県 R. D. B. の絶滅危惧 II 類、出現するメッシュ数 28 となっているが、県の北半分には多く分布し、南半分には非常に少ないとされている。1 年生のシダ植物で、日本には 1 属 1 種が分布する。葉は 3 輪生で 2 枚は水上に浮かび、1 枚は根状葉と

なって分裂し、水中に垂れ下がっている。光周性があり、短日植物だといわれ、秋に胞子のうをつける。形状からの区別は困難だが、2 種類の胞子のうがあり、大胞子のうには雌性配偶体ができ、小胞子のうには雄性配偶体ができるという。

県植物誌では全県分布とあり、他の図鑑類でも、至るところの水田や池沼に分布と記載されている。確かに筆者の周辺

の水田にも普通に見られ、あたりまえの雑草として、ほとんど気に留めていなかったように思う。しかし、最近では、本種の浮いている水田を探すことが難しくなっている。水田のみを目的に調査したわけではないが、佐久町でも数ヶ所、八千穂村では、山間の1ヶ所、臼田町でも数ヶ所が確認できたにすぎない。

筆者の水田には本種は生育していないが、すぐ隣に接する水田には生育が見られる。この両水田の違いはと言うと、筆

者の水田では、田植え直後に除草剤を散布しているが、隣の水田では、フナの養殖をするために除草剤は使っていないが、フナの餌を多量に散布するということがぐらいいで、その他の作業については、ほとんど差はないように思う。

生育の原因が、除草剤にあるのか、餌による富栄養化なのか、この一例だけでは何とも言えないが、究明の糸口とはなるだろう。

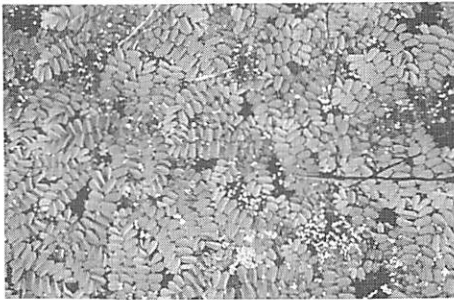


写真 3. 水面を被うサンショウモ
(八千穂村：1999. 08. 30)

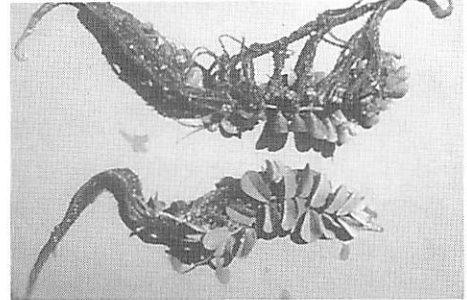


写真 4. 胞子のうをつけたサンショウモ
(八千穂村：1999. 08. 30)

(3) ミズオオバコ *Ottelia alismoides* (L.) Pers. (トチカガミ科 ミズオオバコ属)

県 R.D.B. の絶滅危惧 II 類、出現するメッシュ数 17。全県に点々と産地がある。ミズアサガオなどと呼ぶこともあるようである。葉は水中にあり、オオバコの葉に似る。花は水の上に出て咲き、一日花で咲き終わると水中にもぐる。水田に生育するものは葉の長さ 10 cm ほどであるが、深い水中では葉長が 50 cm にもなるというが、大きなものは見たことがない。ミズオオバコ *O. japonica* と オオミズオオバコ *O.*

alismoides を区別する考えもあるが、本種が、いずれに属するかは定かでない。本種も限られた水田に生育するが、その環境についての記述資料は、見たことがない。

ちなみに、筆者の水田には、生育しているし、隣の水田にも生育が見られる。除草剤には関係がないようにも考えられるが、さらに観察事例を増やしてみたいものである。また、筆者の水田とその付近に限れば、本種は比較的近年になって出現し、ここ 2～3 年来、増加しているように感じられる。若い頃に農作業を手伝わされてた日々の経験の中には、本種のような雑草は見なかつ

たように思うが、あるいは意識していなかったのかも知れない。



写真 5. 水田のミズオオバコ
(佐久市鍛冶屋：1999.09.08)



写真 6. 花をつけたミズオオバコ
(臼田町下越：1999.08.17)

終わりに

以上、水田雑草といわれるものの3種について、知り得ることを感想のような形で述べたが、要は、このような種を、どう保護し、種の保存をしていったらよいかを考

えたいためである。稲作の敵として、人々からどんなに邪魔されようとも、絶滅が危惧される植物という観点からは、全ての植物が平等なはずである。